

ヒマラヤ

No.397



2004 DEC



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

ヒマラヤ400号記念原稿募集!!

HAJ機関誌「ヒマラヤ」は、来年（2005年）3月号で「400号」となります。編集部ではそれを記念して会員の皆様から下記のとおり原稿を募集しますので積極的な投稿をお願い致します。

記

1. 内容：ご自身の「ヒマラヤ地域での体験記」（研究・論文は除きます。HAJの「ヒマラヤ地域」とは、ネパール、インド、

パキスタン、アフガニスタン、ブータン、中国、カザフスタン、キルギス、タジキスタンの9か国です。）

2. 分量：2,800字以内、写真2枚（プリント）（裏に日時、場所などの説明を記入）
3. 締切り：2005年3月末日
4. その他：タイトルを必ずつけて下さい。到着順に随時掲載致します。原稿料はありません。

HAJ華甲望年会

HAJでは、1999年からその年に「還暦」を迎えられた会員を迎えて「HAJ華甲望年会」を開催しております。

本年還暦を迎えられた会員は13名でありましたが、当日都合のつく7名の方をお迎えして下記のとおり「HAJ華甲望年会」を開催致しますので多数の皆様のご参加をお願い致します。

1. 日時：2004年12月11日（土）18時～20時
2. 場所：東京「かんぽヘルスプラザ東京」
3. 会費：8,000円
4. 申し込み：HAJ事務局へ、ハガキ、TEL、FAXをお願い致します。

2004年華甲祝賀の皆さん（誕生日順、敬称略）

- ①山森欣一（2月・東京）②松舘正義（4月・青森）
③督永忠子（4月・在パキスタン）④大神田伊曾美（5月・東京）⑤樋上嘉秀（6月・大阪）⑥山田慶周（6月・長野）⑦中村正勝（9月・長野）

表紙写真

カンピール・ディオールの偵察を終えて下山中振り返るとYashkuk Sar II (6,244m)と思われる山の雄姿を望む事が出来た。この辺りの登山をまとめて発表したW・Heichel氏のWestern KarakorumでもP82の地図とP88の写真でYashkuk Sar IIの位置が違うなど未だ地域は混乱している。

（文・写真：岩崎 洋）

ヒマラヤ No. 397

- | | |
|---|--------|
| 1. パンゴン山脈とラダック山脈の山々 | 沖 允人 |
| 10. 再び「高峰登山調査用紙」提出のお願い | |
| 12. 人類初の八千メートル峰、アンナプルナ I | |
| 14. 寡黙なヒマラヤニスト 名塚秀二君を悼む | 八木原 圀明 |
| 16. アンナプルナ I 入山者 [1972-2004=33年間] | |
| 20. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・Books・ヒマラヤから〉 | |
| 23. [連載] 日本ヒマラヤニスト名鑑 (12) | |
| 24. 事務局日誌 | |

成功だった、しかし……2004年 8 月

パンゴン山脈とラダック山脈の山々

沖 允人

ヒマラヤ山中の黒煙

日本で砲弾の炸裂する音を聞きながら山に登るといことがあるだろうか。休憩のために岩の上に腰掛けながら予想外のことに私は驚いていた。ラダック山脈のルケルー峰(Rukheru, 6,050m)の第1キャンプ(4,800m)に向かって登る途中で、腹に響くような轟音に続いて、眼下に広がるラダック山脈とパンゴン山脈に挟まれたロイ・ヨグマ(Loi Yogma)の幅広い谷の向こうに連なっているパンゴン山脈の山麓に黒煙があがっている。大砲の弾の着弾である。

1時間に1発程度、午前9時頃から午後5時過ぎまで、日曜日を除く毎日、インド軍の砲撃訓練が続けられたのである。

IMFから登山許可の出ていた当初の目標のパンゴン山脈主脈上の北西部にある未踏のハロン峰(Harong, 6,150m)が、偵察の結果、ルートに予定していた西面に雪が全く無いため、上部にキャンプすることが困難であり、また、落石の巣のようなことから、リエゾン・オフィサーと相談し、目標をハロン峰の南東約5kmにあるスパンミック峰(Spangmik, 6,250m)に変更する。

なお、ハロンという山はラダック山脈にもあり、標高は5,715mである。パンゴン山脈のハロン峰と区別するために、ハロン西峰と呼ばれることがある。また、山名と地名が同じものがあるので混乱を避けるため、以下には、それぞれ「峰」と「村」を付した。

8月13日、ロイ・ヨグマ谷からスパンミック峰の西面に這い上がっている支谷にルートを見出し、第1キャンプ地(5,400m)を設定し、必要な装備を荷揚げした。ところが、その翌日、突然、インド軍の将校がジープでベース・キャンプにやって来て、明日から砲撃演習を約3週間行うので、登山は中止するようにと通告してきたのである。

荷下ろしの時間もなく、やむを得ず、スパンミック峰の第1キャンプのテントなどはそのまま残し、ベース・キャンプをロイ・ヨグマ谷の対岸のスパンミック峰と対峙する地点のチブラ村(Chhibra, 4,300m)近くに移し、登山目標をルケルー峰に変更する。ルケルー峰はパンゴン山脈に、ほぼ、平行して延びているラダック山脈南東部の未踏峰である。

標高差2,000mの日帰り登山

砲撃訓練が開始された8日後の8月22日に、放置してきた第1キャンプの装備の荷下ろしをする。ベース・キャンプから第1キャンプまでの標高差は約1,100m、第1キャンプからスパンミック峰までの標高差は約900m、合計約2,000mの標高差を1日で往復するのは至難なことである。しかし、私たちの雇用していた3名のシェルパはこれをやってのけたのである。

午前4時15分にベース・キャンプを出発し、12時30分に頂上に立ち、15時30分にベース・キャンプに帰ってきた。もちろん、スパンミック峰に登頂した帰路には、第1キャンプに放置してあったテント、登攀用具、個人装備など全部を担いで降ろしてくれた。しかも、頂上や途中の様子を、2台のカメラで約60枚の写真に撮影してきてくれた。

ルケルー峰初登頂

ルケルー峰は、標高のほとんど同じ3つのピークが主稜線上に直線状に並んでおり、私たちは南端からP1、P2、P3と仮称した。P1とP3の間は約800mの距離があり、未確認であるが、P3が一番高く、これが地図にある6,050mのピークと思われる。

ベース・キャンプからブレチュム・プー川(Blechum Phu)下流に広がる扇状地を通過し、広いモレインの丘を登り、ルケルー峰の頂上付近の雪田から流れ出る小沢の途中に、8月17日、第1キャンプ(4,800

m)を建設した。第1キャンプまでのルートは遊牧民がヤクや山羊の放牧に使うコースになっており、途中に大きなケルンがある。長くて退屈なコースであるが歩き良いコースであった。

8月18日にシェルパ2名と増田副隊長がルケルー峰東面のガレ場と岩場と雪田を抜け、P1とP2中間のコルに達し、P1の登頂に成功した。標高差約1,000mのルートはかなりの傾斜があったが、ルート工作もフィックスもしないで登り切った。往復14時間の登山であった。

頂上で高性能のGPSで測定したところ、P1の頂上は6,025mであったので、私たちの記録にはこの標高を使用することにした。P2はP1とは、ほぼ、同じ標高で、P3はやや高いようであった。P2の頂上にはケルンらしきものが望見でき、過去に遊牧民が登っていたのかも知れない。

ルケルー峰のP1から主稜線は、一旦、高度を下げ、コルになり、再び高度を上げ、地図に5,800mとある無名峰に続いている。

8月20日、この無名峰に、沖、加藤、増田、シェルパ3名が向かった。頂上直下の東面の貝殻形をした雪田に向かって草付きと岩の斜面を登り、頂上から東に延びる支稜に達し、奥穂高岳東稜程度の岩場を頂上に向かって登ったが、沖と加藤は高度順化が充分でないことから標高5,600mあたりで登山を中止した。増田とシェルパ1名はそのまま登り続け、11時40分に頂上に立った。GPSの測定結果は5,810mであったので私たちの記録にはこの標高を使用することにした。

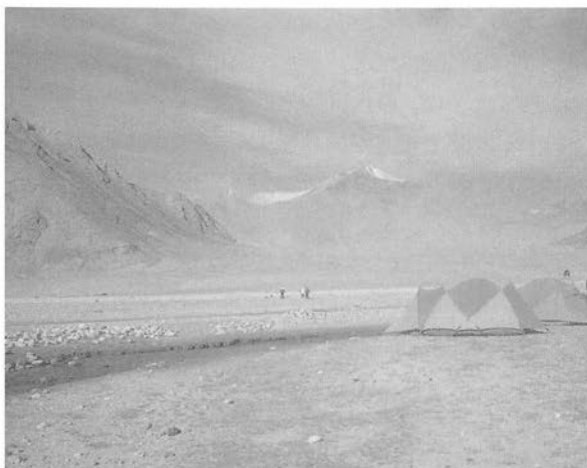
▼BCの近くのチブラ村(4,300m)の人たち



▼BC(4,300m)手前の池と無名峰(c.6,300m)



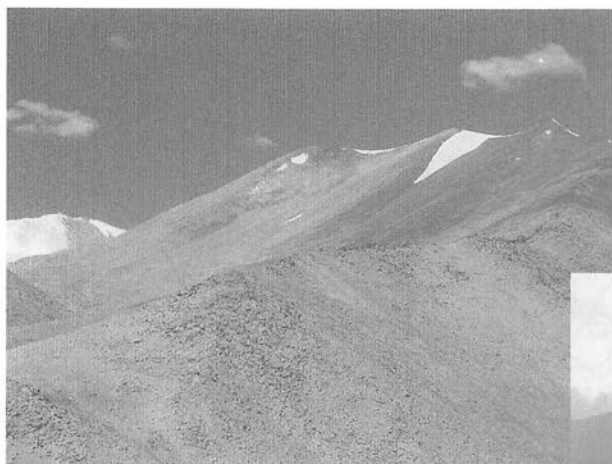
▲ハロン峰(6,210m、右の双子峰)西面



▲BCからルケルー山群(6,050m)遠望

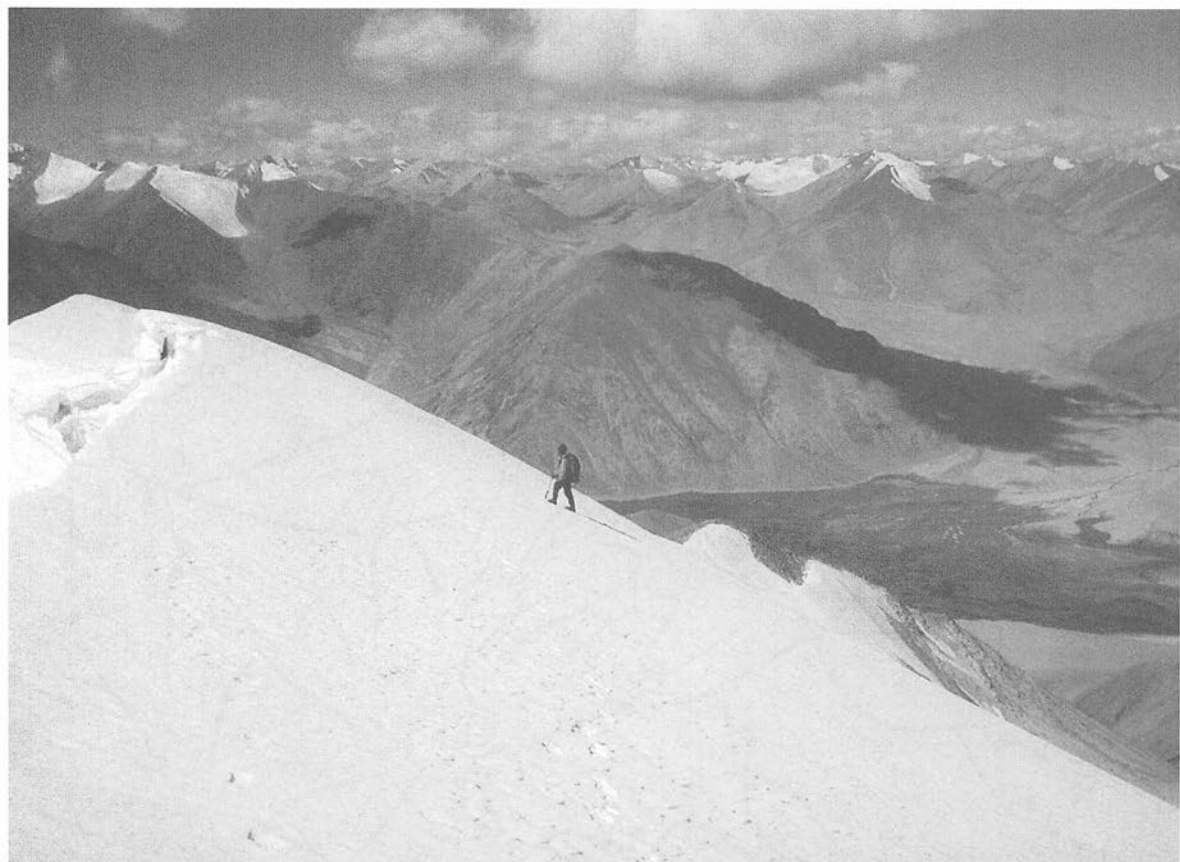


Lemann Map, Sheets-9 より,一部修正



▲ルケルー山群(左からP1、P2、P3)

▼ルケルー峰への途中からC1(c.4,800m)を見下す



▲spanミック峰頂上直下からルケルー山群遠望(右よりの山)

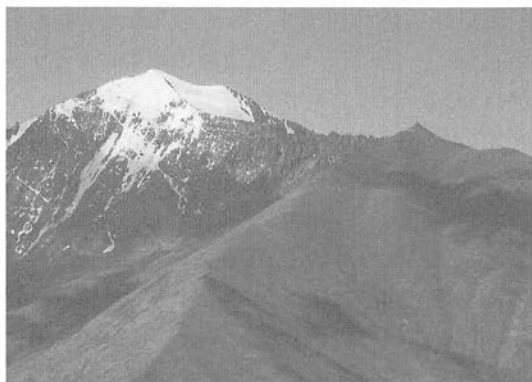
▼ルケルー山群からパンゴン山脈中央部から北部にかけてのパノラマ(左6,220m、右spanミック峰)



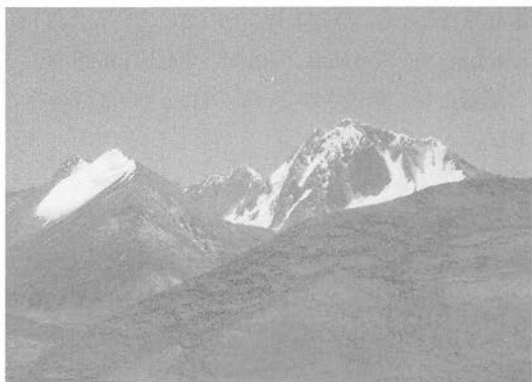
▼spanミック峰(c.6,250m)頂上は反対側



▼spanミック峰北面の無名峰とタンツェ峰に続く雪山



▲BC付近の無名峰(c.6,300m)



▲cong・ラ近くからカクステット・カンリ(?)

パンゴン山脈の山々

タンツェ村から南に延びるパンゴン山脈には6,000m以上のピークが約20座あり、そのうち名前が付けられているのが7座ある。北西部からタンツェ(Tangtse, 6,096m)、ハロン(Harong, 6,210m)、スパンミック(Spangmik, 6,250m)、マリ(Mari, 6,584mまたは6,648m)、カンジュ・カンリ(Kangju Kangri, 6,724mまたは6,725m)、カクステット・カンリ(Kakstet Kangri, 6,461m)である。チュシュル村の北西にタチュンカルー(Tachungkaru, 5,648m)というピークもある。

タンツェの北西に延びるパンゴン山脈の北西部には6,000m以上のピークが3座(6,148m, 6,273m, 6,132m)以上ある。

これらのうち名前のある山のうちで登頂されているのは、スパンミック、カクステット・カンリ、カンジュ・カンリの3座である。最高峰のカンジュ・カンリは1985年11月にITBP隊がエヴェレスト登山のトレーニングとして実施し、寒さを克服し、最高峰に登頂した。カンジュ・カンリの西にある無名の双子峰6,489mと6,449mにも登頂した。(The Himalayan Journal, Vol.52, 1996, pp.266-270)

2001年8月から9月にインド軍の登山隊が挑戦し、カンジュ・カンリの第2登を果たし、カクステット・カンリに初登頂した。カクステット・カンリの北にある無名峰6,580mと南にある無名峰6,134mにも初登頂した。この隊は登山終了後シミディ・ラ(Simidi La, 5,630m)を越えてパンゴン山脈を横断し、パンゴン湖まで歩いている。素晴らしいパノラマ写真を含む豊富な写真とともに詳細な報告がなされている。(The Himalayan Journal, Vol.58, 2002, pp.89-96)

記録として発表されているのは以上の2隊のみである。

私たちが参考にした地図は、AMS(NI-44-9, Pangong Tso)、ロシア製地図(09-44-19)、Lemann Map(Sheets-9)の20万分の1図である。これらのうち、新しいのがLemann Mapで、カムカルテであるが、山名と標高や地名の情報が多い。AMSとロシア製地図は等高線が入っているので地形を掴むに

▼チャン・ラ(5,285m)へのジグザク自動車道



はよいが、地名などの情報は古い。また、インターネットに詳しくれば、LANDSATの衛星からの写真入手することができる。

なお、パンゴン湖をめぐる山々については、「ヒマラヤ」391号に概説したので参照されたい。

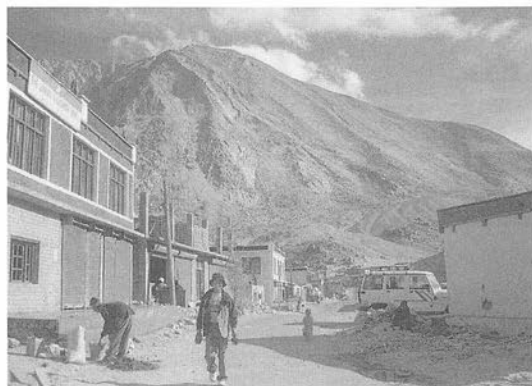
パンゴン山脈への接近路

パンゴン山脈の登山基地に接近するには、レーからチャン・ラ(Chang La, 5,285m)を越えてタンツェを経由する北側からのコースが一般的で一番近い。タンツェで道路が東西に分かれ、チュシュルで合流する。いずれのコースも1泊2日で登山基地近くの道路上まで車で達することができる。

東面のパンゴン湖側なら、タンツェからルクン(Lukung, 4,242m)のチェック・ポストを経由し、半日でチュシュルまで走ることができる。チュシュルからはマリ(Mari)やスパンミックの村々を経由してタンツェに達するコースがとれる。チュシュルから半日である。

南側から接近するなら、カルー(Karu)の村からツォ・モリリー湖へ向かう道路の途中にあるマヘ(Mahe)のチェック・ポストを経由し、マヘからインダス川に沿って下り、ニョマ(Nyoma)の村からゴチャン谷(Gochang)を遡り、ベルン・ラ(Belung La, 5,270m)、ツァカ・ラ(Tsaka La, 4,727m)を越えて、チュシュルの軍の基地を経由し、パンゴン湖畔の道路で東面に入るか、コングラ・ラ(Kongra La, 5,500m)を越えてパンゴン山脈の西面に入るコースがある。レーからチュシュルまで、最低2日かかる。

▼パンゴン湖入口のタンツェ村(c.3,795m)



高所順応を兼ねてトレッキングしながらチュマタン近くの登山基地に入るには、マヘからピャルン・ルンパ谷(Pialung Lungpa)に沿って山道を辿り、カクステット・ラ(Kakstet La, c.5,400m)とスタタラ・ラ(Stathra La, 5,010m)を越えてチュシュルに至るコースがある。

チュマタンの温泉(Chumathang)からチュマタン・プー谷に入り、同名のカクステット・ラ(Kakstet La, c.5,750m)を越えてチュシュルに至るコースもある。

ハロン峰へのトレッキング・コースとしては、マヘの約40km手前のリクチェ(Likche)の集落からヨグマ・ラ(Yogma La, c.5,710m)を越えてブルチェム・プーの谷を経てチブラ村(Chhibra)に至るコースがあり、村人が放牧などのために比較的歩いているようである。私たちのルケルー峰の第1キャンプへのルートはこのコースの下部のチブラから5kmほどを利用した。

以上のコースはいずれも途中で5000mを超す峠があり、最低5日程度かかると思われる。

なお、一般的にパンゴン山脈の東側は地形が緩やかで積雪が多い。西側は地形が急峻で、ベース・キャンプ地点に達するのに日数が少なく済むが積雪が少ないので、高所キャンプでの水の確保が困難なことがある。

上記のどのコースも10月中旬から6月初旬までは途中の峠に積雪があり、車が入れなくなる。この期間に入山するなら、ヘリコプターを特別の許可を取得して利用するしかないのではなかろうか。ヘリポートはパンゴン湖畔などの軍隊の基地にある。

また、積雪のない期間でも、これらのコースは車道はあるが、可成りの悪路でもあり、未舗装の部分も多く、険しい地形のため、土砂崩れが頻発する個所も多いので余裕をもった計画を立てる必要がある。高い峠では夏期でも降雪があることがある。

マナリとレーを結ぶ陸路は冬季は閉鎖されるが、ニュー・デリーとレーを結ぶ空路は冬でも運行している。ただし、天候によって運休することも多く、また、安全のためと、陸路閉鎖のために空輸する荷物がかかなり多いために、乗客定員の70%程度しか乗せないこともあり、座席の確保が困難である。私が1999年12月末に行ったときには5日間も座席待ちをしたことがある。

高い峠を越える自動車道路は閉鎖されるが、レー周辺やツォ・モリリー湖近くまでは凍ったインダス川を眺めながら車で走行することができる。しかし、レーのジープはタイヤ・チェーンを持っていないので、水の流れた跡や小川は凍結し、スケート場のようになっているので大変スリルがある。

ポーター事情

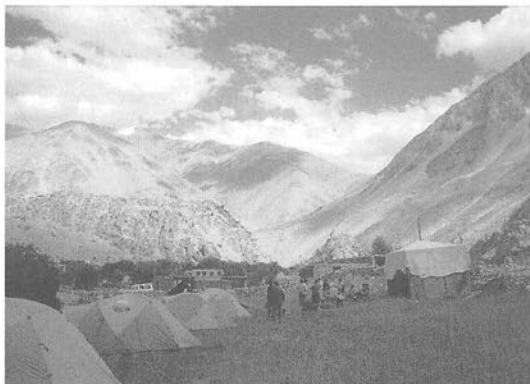
パンゴン山脈の登山基地となる村はどこでも人口は少なく、ポーターの現地雇用は難しい。ポニーやヤクの使用も可能であるが、時期によっては、これらも困難である。したがって、確実にポーターを雇用するためには、レーの旅行社などに依頼し、レーから連れていくか、先発隊が周辺の村々に行き事前交渉しておくことになる。

ポニーやヤクの使用はさらに手間がかかる。ポニーやヤクは通常、村から離れた場所に放牧されていて、必要頭数を集めるのに日数がかかる。特にヤクは標高の高いところで放牧されているのでなかなか集めるのが困難である。しかし、雇用できれば1頭で、ポーター2人以上の荷物が運べ、数時間は休まずに歩くので、標高5,000m程度までの荷揚げには有用であり、激流の渡渉にも強力である。ポーターやポニーやヤクの料金はケース・バイ・ケースであり、交渉する人の能力による。

これからのこと

今回の登山は、パンゴン山脈の中でも特に資料のない山を目標とした探検的な登山であった。しかし、

▼パンゴン山脈北部のタンツェ(6,098m)雪山



日本出発前に入手したLANDSATの衛星写真で調査したよりも雪が予想外に無く、また、国境地帯故のインド軍の砲撃訓練という「事件」がおり、計画通りの登山ができなかった。

また、今回の登山は、2004年12月から2005年1月にかけて実施する予定であるラサからカイラスを経由してカシュガルまでの約1,000kmを厳冬期に初縦断するための高所訓練が目的でもあった。したがって、標高4,000mを越す高地で20日ほど生活したことはこの目的を充分達し得たといえる。

しかし、隊員の探検的登山への志向と意欲がまちまちで、探検的登山を志す者にとっては「宝の山」といっても過言でないパンゴン山脈やラダック山脈の未踏の山々を、貪欲に登り調査しようという思いのベクトルが一つにならなかった。この結果、それぞれに満たされない気持ちの残る遠征となってしまったようである。このことが、チベット厳冬期縦断計画にも影響し、参加者が激減し、隊の成立が「風前の灯」といった状況となっている。少数になっても、また、1年延期してでも実現したいと私は考えている。

沢木耕太郎の「ミッシング」という短編がある。インドを旅して行方不明になった青年の話である。八方手を尽くしたが、結局、行方不明のままである。その父親が「うまくいってれば何かを掴んで帰ってきたように思う」とボツリというくだりがある。私は、隊員たちがそれぞれにインドの辺境地帯の登山と旅の中で何かを掴んで帰ってきたことを期待している。

もし、もう一度これらの地を訪れるとするならば、隊員の探検的登山への志向を良く把握し、目的に

向かう意思統一を計ってチームを構成しなければならないと反省している。

登山と旅行の手続きについては、登山許可はもちろんであるが、それに加えてIPL(インナーライン・パーミット)を取得しておくことが必須である。そして、国境に駐屯しているインド軍との事前の綿密な調整が必要である。これらは、いずれも容易なことではないが、万全を期すなら、努力を惜しんではない。

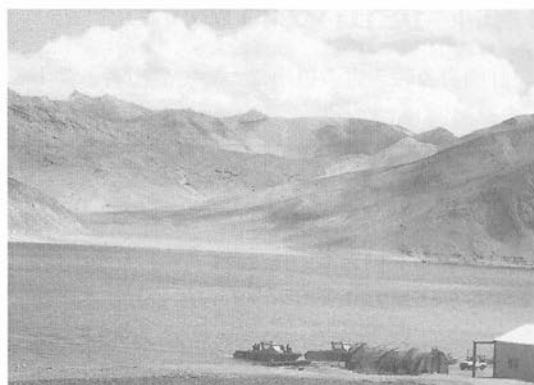
インドの国境地帯での登山ではインドとの合同登山が原則であるが、今回は、特例として日本人単独の許可が得られた。もし、インドと日本の合同隊を構成したとしてもいろいろな問題は簡単には解決できないであろう。かえって言葉や生活習慣や食べ物の嗜好の違いによる摩擦が起こるのではないかと思う。

なお、登山許可手続きの煩雑さ、登山料の高額(6,000m程度の山で4,000ドルは法外な額だと思う)、IMFまかせで直前にならないとリエゾン・オフィサーが分からないこと、登山用ビザ(X-VISA)の取得までに時間がかかり過ぎることなどIMFとインド政府に要望したいことは多々ある。現在のような煩雑さが続くなら、無許可登山が頻繁に行われるようになるであろう。現に、レー周辺の6,000m級の山々では現地旅行社が手配した無許可登山が半ば公然と行われている。約25社あるといわれるレーの旅行社は、IMFを完全に無視しており、IMFもこのことを知ってはいるが手の打ちようがないようである。この傾向はますます大きくなると予想される。現状から考慮して、レーやマナリ周辺の6,000mクラスの山々は、環境税のようなものだけ旅行社を通して地方政府に支払い、リエゾン・オフィサーもなしで簡便に登山できるようにして欲しいものである。そうしないと、野放し登山が横行し、遭難などが発生した場合に対処が困難になるであろう。

「All most success」

ニュー・デリーへ9月6日に戻り、日本に帰る前日IMFへ登山報告に行った。「登山はどうでしたか」と局長に聞かれた。私の返事は「All most success」であった。「成功だった、しかし……」と答え、そ

▼パンゴン湖と北東部の国境に続く山々



れから約1時間、リエゾン・オフィサー、増田副隊長、隊員2名も交えて、登山経緯を報告し、反省や、今後のパンゴン山脈など特別な山域に登山許可をする上でのIMFへ種々の要望を文書と口頭で行った。通常の登山隊は、必要書類である登山報告書を提出してそそくさと退席するようであるから、私たちの報告は異例のことであったようである。しかし、私としては、登山報告書を提出しただけで帰る気持ちにはなれなかった。

マタイ伝に「人もし汝に一里行くことを強いるなば、二里ゆけ」という語句がある。登山に当てはめると、第一里とは義務的な日常の仕事であり、第二里とは自由意思による活動のことである。登山は第二里の行為であり、これが雁字搦めに縛られているならば登山の価値は半減する。

以下に日程概要とメンバーを付記するが、詳細な登山記録については、帰国報告書(限定30部発行。HAJ、JAC、日山協の事務局に寄贈)を参照していただきたい。



▲チャン・ラにて隊員とリエゾン(右端)インド人スタッフ(左端)

▼パンゴン湖と南西部の国境に続く山々



日程概要(標高のc.は概略)

2004年

8月5日：足利と名古屋から成田空港集結。成田発、ニュー・デリー着。

8月7日：ニュー・デリーから空路レー(c.3,700m)へ。

8月10日：レーから車でタンツェ(Tangtse, c.3,795m)へ。

8月11日、12日：ハロン峰(Harong, 6,210m)とスパンミック峰(Spangmik, 6,250m)を偵察。

8月13日：タンギャック(Tangyak, 4,300m)村にBC建設。スパンミック峰のC1(c.5,400m)を選定。

8月14日：砲撃訓練のためタンギャックからチブラ(Chhibra, c.4300m)村近くにBCを移動。

8月17日：ルケルー山群に向かい、C1(c.4,800m)を建設。

8月18日：ルケルー峰・P1(c.6,025m)登頂。

8月20日：ルケルー山群・無名峰(c.5,810m)登頂。

8月22日：スパンミック峰登頂。

8月25日：BC撤収し、パンゴン湖(Pangong Tso)を経由し、レーへ。

8月27日～9日6日：レーを出発し、ツォ・モリリー湖(Tso Moriri)とツォ・カール湖(Tso Kar)を経由し、マナリに出て、隊を二分し、ヒマチャール山域とガルワール山域を探索し、ニュー・デリーに帰着。

9月10日：成田空港に帰着、足利と名古屋へ。

隊の構成(年令・出発当時)

隊長・沖允人(69)、副隊長・増田秀穂(61)、マネージャー・梶田明(70)、登攀隊長・武藤政之(63)、隊員・加藤功(66)、沖道子(66)、増田歳子(61)、シェルパ3名、キャンプ・スタッフ5名。ジープ2台、大型トラック1台。

再び「高峰登山調査用紙」提出のお願い

山岳団体が本年度から「高峰登山調査用紙」を統一し、計画書&報告書の提出について登山者、登山隊に対してお願いしたことは本誌391号で紹介しましたが、未だ浸透していないようなので再度紹介します。

高峰登山調査用紙の統一について

私共、全国的な規模を有する登山4団体〔(社)日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、(社)日本山岳会、日本ヒマラヤ協会〕は、国の内外からヒマラヤをはじめとする高峰登山の情報を求められておりますが、これまでは各団体が独自にこれに対応して参りました。

また、その対応のためとそれぞれの団体が主催する研究会等の資料として、各登山隊に対して登山の概要を報告して戴く「登山調査用紙」を、それぞれの団体独自の内容を網羅した様式で提出をお願いしておりました。

このことは一つの登山隊に3～4団体から少しづつ内容の異なる「登山調査用紙」提出の依頼が届くことになり、結果的に提出が滞るという弊害が見受けられ、なによりも登山隊にとって複数の調査用紙を作成することは多大なる不利益でもありました。

21世紀に入り「高峰登山」の世界は一変しております。その第一の要因は、ヒマラヤ諸国に代表されるように「受入れ国側」の規制緩和が進んだことにあります。ほとんどの国が「推薦状」制度を廃止したため、我が国からヒマラヤ諸国の山々へ入る登山隊を、私共登山4団体が自動的に把握し、その結果を収集・整理することが困難な状況となって参りました。

一方、私共が実践してきたこの素晴らしい「高峰登山」は、文化活動として広く一般社会と密接なかわりを持ちながら進展してきました。登山は決して一般社会から遊離した存在ではありません。

この点からも登山者の行為の結果(記録)を収集・整理し、一般社会に情報を提供しつつ次代へと継承していくことは、「登山文化」の担い手である登山4団体の責務であります。

この度、私共登山4団体と、全国的な集団であります「日本ヒンズークシュ・カラコルム会議」は、登山者の不利益を解消し、記録の収集を積極的に行い整理し、これを次代に引き継ぐべく、登山隊・登山者から提供して戴く「高峰登山調査用紙」の様式を統一し、且つ、その提出先をも統一することで合意致しました。

具体的に内容につきましては別紙のとおりであります。私共の趣旨をご理解戴きまして、登山者の皆様をはじめ関係者各位のご協力とご支援を宜しくお願い申し上げます。

2004年3月27日

高峰登山計画書&報告書の登山隊区分

〔組織内公募登山隊＝日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本ヒマラヤ協会など全国的規模で構成されている団体が各組織内で隊員を募集した登山隊〕
〔一般公募登山隊＝社会人山岳会、職域山岳会、大学山岳部・OB会などが組織した登山隊〕〔国内・外国商業登山隊＝営利を目的として国内は日本人が、外国は外国人が一般から隊員を募集した登山隊〕〔その他＝個人的な登山〕

社団法人 日本山岳協会

会長 田 中 文 男

日本勤労者山岳連盟

会長 守 屋 益 男

社団法人 日本山岳会

会長 平 山 善 吉

日本ヒマラヤ協会

理事長 山 森 欣 一

日本ヒンズークシュ・カラコルム会議

事務局 亀 井 正

高峰登山調査用紙統一の合意事項

[2004年3月27日]

1. 対象山岳：

アジア地区は標高5,000m以上

その他地区は標高6,000m以上

2. 統一調査用紙：

用紙1 高峰登山計画書（別紙用紙A4サイズ1枚、1ページ）

* 別途作成した計画書がある場合は、それを提出してください。

* FAX送信でも構いません。

用紙2 高峰登山報告書（別紙用紙A4サイズ2枚、4ページ）

* 報告書につきましては、時間的なこともありますので本用紙を提出して下さい。

3. 実施時期：

2004年（平成16年）4月1日

4. 登山隊、登山者への統一調査用紙の送付実務と提出先：

* 一般登山隊及び一般登山者

（社）日本山岳協会

〒150-0805 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育館内

TEL 03-3481-2396 FAX 03-3481-2395

* 但し、日本勤労者山岳連盟所属登山隊及び登山者は、同連盟の共済制度と連動するため同連盟とする。

日本勤労者山岳連盟

〒162-0805 東京都新宿区矢来町108 第5英晃ビル

TEL 03-3260-6331 FAX 03-3235-4324

5. 提出費用：

登山隊及び登山者負担でお願いします。

6. 高峰登山計画書及び報告書の利用：

登山団体、登山者、報道機関、一般を問わず誰もが別途定める費用を納入して利用することができます。

海外登山調査用紙統一についての経緯

山岳4団体では、毎年夏に『三役懇談会』を開催しているが、2003年7月の同懇談会席上にて、本会から「海外登山調査用紙の統一」について提案。同年11月に改めて他3団体に実務者会議の開催を呼び掛け、同時に「日本ヒンズークシュ・カラコルム会議」にも声を掛け、各団体からの賛同を得た。12月～3月に4回の実務者会議を開催し、協議検討を重ねた結果下記のとおり『合意』に達し、それぞれの団体での機関決定を経て、3月31日、岸記念体育館会議室において記者発表を行った。

今後はこの5団体の合意にもとづいて『高峰登山』についての、計画・報告が一カ所（当初は2カ所）に集約されることになる。関係各位のご協力を賜りたい。（文責：理事長 山森欣一）

実務者会議 [日本山岳協会＝尾形好雄常務理事、日本勤労者山岳連盟＝香取純海外委員長、日本山岳会＝大蔵喜福常務理事、日本ヒンズークシュ・カラコルム会議＝亀井正、HAJ＝山森欣一理事長]

3月31日記者発表 [日山協＝田中文男会長、八木原暁明専務理事、尾形常務理事、HAJ＝山森理事長]

人類初の八千メートル峰、アンナプルナⅠ

〔チベットからネパールへ〕

第二次世界大戦の終結は、世界最高峰を含むヒマラヤの高峰への挑戦の舞台を変えることになった。

1949年10月に建国を発表した「中華人民共和国」は、「チベット」が歴史的に中国の領土であるとして、1950年武力をもってチベットへ侵攻した。そのことは、ヒマラヤ山脈への北側からの挑戦が不可能になったことを物語っていた。

一方、南側のネパールは、それまでイギリスと協力関係にあったが、1947年にイギリスから独立したインドの影響で、ネパール国内にも民主化要求の運動等の不安定要素が生まれつつあった。そこに、中国のチベット侵攻があり、インドは緊張した。

そんな折の1948年末、イギリスのジョージ・ファルコナー大使が、ネパール・ヒマラヤに登山隊を派遣する申請を行ったところ、小さな隊であることから許可された。それが、1949年のティルマン隊であった。

そして、朝鮮半島に暗雲が立ち込めていた1950年春、4,000キロ離れたネパール・ヒマラヤ山中では、遂にその後15年に及ぶ八千メートル峰初登頂の長い闘いの幕が切って落とされたのである。その舞台こそが、アンナプルナであった。

長引く第二次世界大戦は、ヒマラヤ登山を錆びれさせ登山の進歩をも遅らせていた。しかし、一方ではその戦争が、科学技術の急速な進歩をももたらし、皮肉なことに、人類初の八千メートル峰初登頂に貢献することになった。

〔フランス隊の初登頂〕

開国したネパールに逸早く乗り込みアンナプルナⅠの成功によって、人類初の八千メートル峰登頂の栄誉に輝いたのは、フランスであった。

アルプスの登攀では知られていても、ヒマラヤ登山の経験は戦前の1936年にガッシャーブルムⅠ

の経験しかないフランスが何故八千メートル峰に挑み栄光をつかんだのか。

そこには、リュシアン・ドヴァスの存在があった。彼は、戦前のアルプスで名を成したアルピニストであったが、当時、事情があってグランド・ジョラスやアイガーの北壁に登攀することが出来なかった。加えて大戦中に大病を患い、大登攀を諦めざるを得なかった。

しかし、1949年になるとフランス登山界の主要な組織である、フランス山岳会、フランス山岳連盟、高嶺会(GHM)を纏める立場となり、フランス政府を動かし登山隊派遣を実現したのであった。

それまでヒマラヤで登頂された最高峰は、インド・ヒマラヤのナンダ・デヴィ(7,816m)であったから、フランスが狙ったのは当然八千メートル峰であった。目標はダウラギリⅠとアンナプルナⅠであった。

メンバーは、高嶺会事務局長のモーリス・エルゾグ(31)を隊長に、リオネル・テレイ(29)、ルイ・ラシュナル(29)、ガストン・レビファ(29)、ジャン・クジー(27)、マルセル・シャッツ(28)の6名、みなアルプスの登攀で名を挙げた名クライマーばかりである。そして医師のジャン・ウドー、写真家のマルセル・イシャックに輸送担当としてフランシス・ド・ノァィエルが加わった。

ぶっつけ本番のため取り敢えず二つの峰の登路を偵察した。ダウラギリには登山路を見出せなかった。そこで目標はアンナプルナに絞られた。

偵察に時間をとられたため、登山はモンスーンがやってくるまでの時間との勝負闘となったが、彼らには前述したように戦争がもたらした、科学の進歩の象徴ともいえる軽量化された装備(天幕、寝袋、羽毛服、ロープ等)があった。それらはその力をいかに発揮し、首尾よく初登頂に成功した。

こうしてエルゾグとラシュナルは、世界初の八千メートル峰サミッターの栄光を手にしたもの

の、帰路に悲劇が待っていた。その物語は手に汗を握って読まなければならないほどスリリングである。道々エルゾーグとラシュナルの手足の指は、ウドーのメスによって切り落とされていき、そうして二人は生還したのであった。

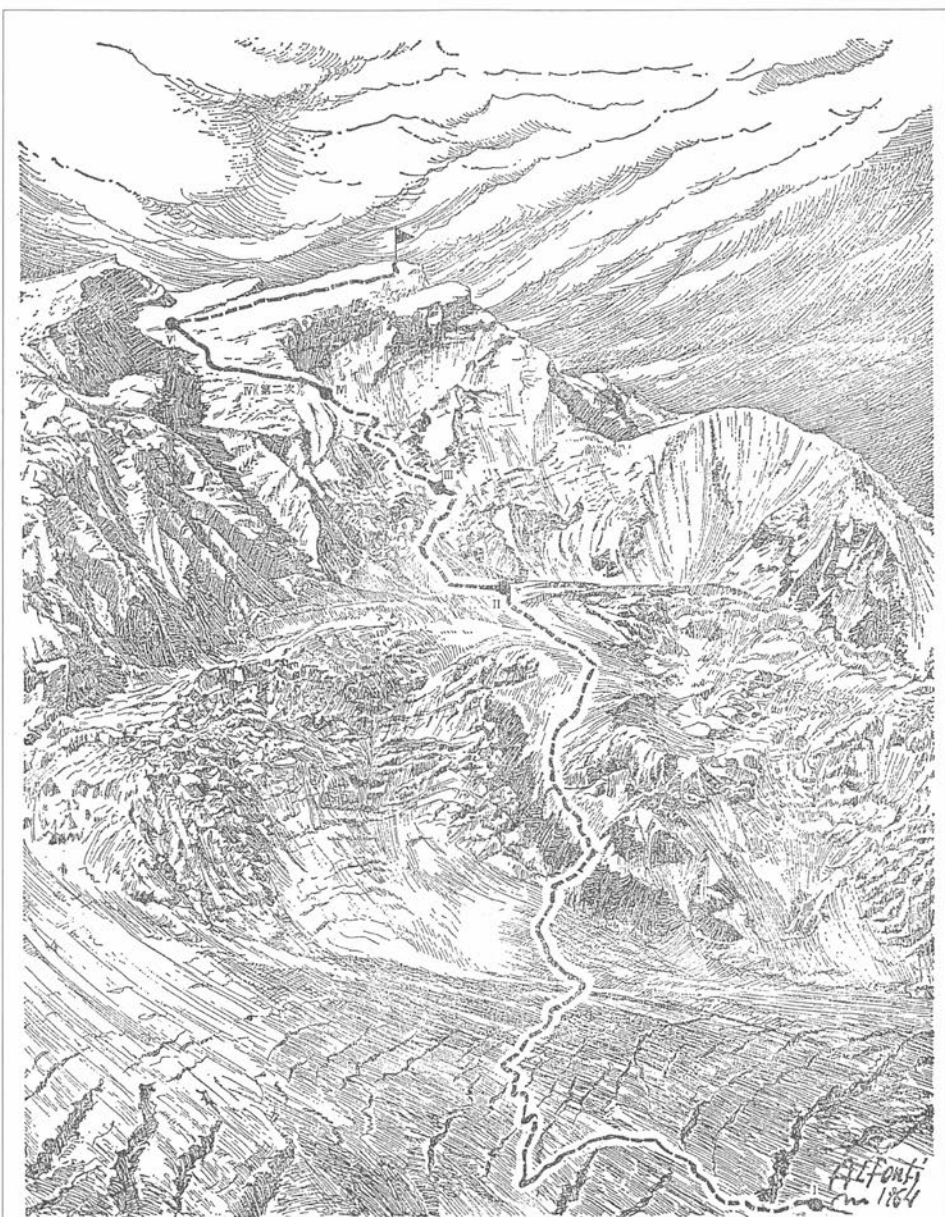
そのラシュナルは、1955年にアルプスでスキー滑降中にクレバスに飛び込み消え、良きパートナーであったテレイも、1965年南フランスの故郷に近いヴェルコール山群の岩場で墜死した。

【参考文献】

1. ネパールの歴史（西澤憲一郎著：劉草書房）
2. ヒマラヤ（川喜田二郎編：朝日新聞社）
3. ネパール・ヒマラヤ（W・H・ティルマン著、深田久弥訳：四季書館）
4. はるかなるエベレスト（W・H・マーリ著、山崎安治訳：あかね書房）
5. 無償の征服者（リオネル・テレイ著、横川文雄・大森久雄訳：二見書房）

〔文責：山森欣一〕

〔ヒマラヤ巨峰初登頂（マリオ・ファンティン編、牧野文子訳）より〕



アンナブルナ、初登頂ルート

寡黙なヒマラヤニスト

名塚秀二君を悼む

八木原 圀明

名塚にまで逝かれてしまった。今の私にとっては「遅まきヒマラヤニスト・名塚」であっても、どうしても山田昇とダブって来る。危険な領域にまで踏み込まなくてはつかみ得ない栄光、八千メートル峰十四座。またしてもその夢の途中で奪われてしまった。

名塚自身は山田との年の差、実績の差を追い越し難い、いや絶対に追いつけない尊敬を伴う大きな存在として山田昇をとらえながらも、少しでも近づいてみたい、近づかなければと思い始めていた。

山田の追悼集「白き山河の旅人」の中で名塚は「八千メートル峰十四座完登は、九座十二回、志半ばでマッキンリーに消えてしまったが、日本人として、いつか誰かが十四座完登を行うだろう。しかし、今は誰かがでは無く、山田さんに『俺の行動を見ていろ』と教えてもらったことを大切に、私が目指してゆきたい」とはっきりと書き記した。

八三年のあかぎ国体の準備の頃に名塚をおぼえ、話しをするようになった。我々にとっての本番は、ポスト国体の冬のアンナプルナ南壁であった。岳連のヒマラヤは七八年秋のダウラギリ南東稜以来途絶えている。個人的には数人がH A Jやカモシカ同人隊に参加し、まずまずのレベルの登山を続けてはいた。特に八二年のダウラギリ・ペアールルート隊には十人も岳連会員が参加し、着々と次への人作り、経験者作りを試みていた。

八四～五年冬のアンナ南壁は失敗に終わった。帰りのキャラバンで私は名塚に聞いた。「名塚、またアンナに来るか?」。「ぜひ」が二つ返事で返って来た。帰国した我々を待っていたのは植村直己物語撮影隊の最後のエベレストロケであった。

アンナの成功のためには一度でも多いヒマラヤ登山を経験させよう、と隊長を引き受け、群馬中心の隊員構成として八五年秋に登った。

南峰への登りでトップにでた名塚はヒラリーステップの柔らかい雪を乗り越し、ロープを自分のバイルで固定し、足で押さえていた。私はそれをつかんで登り、名塚の横をすり抜けて「オレは先に行ってるぞ」と頂上への緩やかな雪稜を登った。どうせ山田に追いつかれるのだからと思っていた。山田は無酸素であった。

頂上直下に腰をおろし、山田と名塚の登頂の瞬間の姿をカメラにおさめた。七名が同時に登頂し、エベレストは終わった。

八七～八年冬のアンナ南壁。名塚は成長していた。核心部・ロックバンドのルートワークを成し遂げるのである。自信はなかったらしい。前夜私から「誰が明日、岩壁帯のルートワークをするんだ」と聞かれ、「小林にでも」の名塚の答えを言下に却下し「ダメだ、名塚か三枝がやれ」と言われ、仕方なく「ハイ」と返事をしてしまったためにトップに出たルートワークではあった。「良くやった」と私はほめた。

サガルマータ南西壁の冬期初登攀に成功し、報告書用インタビューに名塚は「もっと楽な遊びがあるだろうに」と思いつつも、いつしかヒマラヤの高峰に惹かれ、のめり込んだのはこの時の『良くやった』のアメ玉をしゃぶらされたからではなかったか、と思う、と答えている。

私の後任の岳連海外登山研究会委員長になった名塚はアンナ南壁とサガルマータ南西壁冬期初登攀という実績を踏まえての次の群馬のヒマラヤ登山を考えると気が重かった。

「岳連としての八千メートル峰十四座登頂」はどうか?カラコルムの八千メートル峰連続登頂は?と思い悩み、結局「夢のある登山」は自分たちが登り続ける中でしか見つけることは出来ない。そう考えることで腹は決まり、覚悟は出来た。

自身の実績はエベレスト(二回)、チョゴリ

(K2)、カンチェンジュンガ、チョー・オユーの八千メートル峰四座五回。十四座ははるかに遠い。GI、GII、シシヤパンマ、ブロード・ピークと八座を数え、やっと十四座が視界に入った。意識せざるを得なかった。それも岳連としてではなく、名塚個人としての十四座の記録であった。

名塚秀二遺稿

〔母なる大空（群馬県山岳連盟刊）〕より

冬期サガルマータ（世界最高峰）南西壁初登攀

頂上へアタック

1993年12月18日、6時45分出発。雪目はすっかり治っている。今日は雪目にならないように酸素マスクをきつくセットし、テントの外に出たが、たちまちサングラスは凍りついてしまい、役に立たなくなってしまう。引き返すことは出来ない。昨日も帰れたのだ、今日も大丈夫と自分に言い聞かせ、後藤を先頭に昨日の到達点まで急ぐ。途中私の酸素が切れてしまい、後藤に遅れること約30分で到達点へ着く。

ここより準備を終え、ルートを確認する。このまま直上すると小さなロックステップに捕まってしまう。右へ約30m斜上し、南峰から派生している小さな尾根に出て後藤を待つ。この時ふと上を見上げると、何と稜線はすぐそこに見える。南峰の科尔まではあと少しだ。「行けるかも知れない」。つい嬉しさが押さえ切れず後藤に「稜線が見えるぞ」と大声で叫ぶが、何せ酸素マスク越しである。後藤は立ち止まって自分を振り仰いで見ているが何を言っているのかわからない様子で、またすぐに登り出す。後藤が到着し、稜線がすぐそこに見えることを伝えるが、後藤は無表情である。まだいくらか緊張して登っているのだろう。

昨日回収したロープを使い、いっぱい伸ばした所で南峰直下の岩場に突き当たる。右へ雪田が続いているのだが、先が見えない。左は5m位の岩場を乗り越せば、その上は稜線まで雪で繋がっているように見える。まず右へ3m位廻り込んで見たが、まだ先が見えないので引き返し、左へ廻り込む。すると左へ雪面が続いており、まず一段平

三年前のダウラギリでの凍傷の指をかばいながらクライミングに没頭し、技術に磨きをかけながら癒えるのを待ち、今度はヒマラヤ向けに肉体を改造し、満を持してのアンナプルナであった。かえすがえすも残念な結果である。

らな岩へ乗り、上に大きく被さっている岩の下を行こうとするが、ザックが邪魔をして通り抜けられない。しかたなくザックを先に放り投げ、這いつくばって抜け出す。これでロープは残り1本。稜線はすぐそこに見えているが、残り1本のロープはこの先のヒラリーステップで使わなければならない。

今登って来たロープを固定し、右へ少し廻り込むと稜線まで40m弱の雪面が続いている。もうこうなれば躊躇していることはない。行くだけだ。ロープ無しで稜線に飛び出す。耐え難い風が西面から襲って来る。雪煙を東壁側へなびかせている。後藤を待って、ヒラリーステップ用にロックピトンとスノーバーを少し持ち、他の荷物を全てデポし、頂上を目指す。

これまでのヒマラヤ登山では自分はアタックに出て頂上を目指す時、アンザイレンをせずに行動してきたが、あまりにも強い風ゆえ、スタカットで登ることにした。ヒラリーステップまでの稜線は痩せており、ネパール側を進むが、ロープは大きく東壁側に流れてしまい操作しにくい。すごい力である、そしてヒラリーステップは、残置されたロープが色とりどり5本位あり、全部まとめて引っぱって見る。何ともない。後藤に確保してもらいロープ全部を掴んで乗越す。もう頂上はすぐそこだ。這いつくばるような姿勢で慎重に一步一步足を出して行く。風は全く息をしてくれない。左前方から常時風を受けている形で進む。

見えた。頂上だ。2ピッチで到着。後藤を待って下へ報告する。15時20分ついに冬期サガルマータ南西壁より登頂に成功。

アンナプルナⅠ入山者 [1972-2004=33年間]

(注) 派遣母体名の後ろの()内は、登山隊+報道等であるが、学術隊員、医師等は登山隊員とした。氏名の前の×は、その登山で死亡した者。

[1] 1972年春・偵察

日本山岳会信濃支部(4)

隊長：奥原教永(41)／隊員：高橋貞利(36)、牛越正(29)、金子丞二(33)

[翌年の登路偵察のため北面に入山。3月28日北アンナプルナ氷河の4,300m地点にBC設営。5,300m地点まで偵察した。]

[2] 1973年春

日本山岳会・信濃支部(11)

隊長：塚本(43)／隊員：浅輪幸久(38)、松永敏郎(39)、堀内章雄(39)、×高橋貞利(37)、×濱正則(36)、降旗孟(32)、×牛越正(30)、新谷剛(29)、塚原賢勝(29)、×片桐一三(23)

[長野県初の八千メートル峰登頂を目指して4月1日北面4,600m地点にBC設営。6日C1(5,300m)、13日C2(6,000m)建設し、北東バットレスの6,500mまで到達したが、雪崩とキャンプ地の関係でこのルートを放棄し、フランスルートへ転進した。26日C3(6,800m)、5月8日C鎌氷河を横断してC4(7,100m)、13日頂上に続く雪原にC5(7,500m)を建設した。14日第一次アタックは頂上直下50mwで疲労のため断念。15日第二次は主峰と中央峰のコルで悪天候のため断念。18日の第三次に向けてC5への荷揚げを行ったが、17日は悪天のため全キャンプ停滞した。C3はテントが埋没、流される危険があり、C4も一部埋められた。そのため第三次アタックは中止とした。18日C4、C3共、下山を決行。C4組の高橋、浜、片桐と、C3組の牛越、リンジが雪崩のため行方不明となった。]

[3] 1979年春

静岡県山岳連盟(12)

隊長：八木公信(59)／隊員：石川和勇(45)、滝田博之(38)、久保田保雄(36)、海野博之(35)、

柳沢修司(34)、三ッ井孝(33)、工藤定雄(32)、田中成三(31)、森田好茂(29)、渡辺勝宏(27)、田辺恵造(46)

[日本人初登頂を目指して北面に入山。3月28日4,200m地点にBC設営。4月6日C1(4,900m)、11日C2(5,400m)、北東バットレスを抜けた6,100m地点に24日C3建設。鎌の横にC4(6,850m)、5月4日C5(7,500m)を建設した後、8日、田中とベマが登頂に成功した。酸素はC5の睡眠用に使用したのみで、行動用には使わなかった。]

[4] 1980年秋・偵察

山学同志会(1)

坂下直枝(33)

[冬の偵察のため10月末に単独で入山したが、5,700m地点でヒドン・クレバスに転落し右手親指を骨折した。]

[5] 1981年冬

山学同志会(1)

坂下直枝(33)

[1月26日シェルパ二人と4,200mにBC設営。29日(4,950m)、2月4日(5,600m)、12日C3(6,300m)建設し、13日単独で6,700mに到達したが、日数不足で登頂を断念。]

[6] 1981年秋

イエティ同人(11)

隊長：吉野寛(31)／隊員：佐々木慶正(26)、×加藤康二(32)、小林利明(32)、柳沢幸弘(26)、遠藤晴行(24)、青田浩(23)、沢上登(29)、木内聡(29)、水野恭一(33)、鈴木あつ子(32)
／撮影：小田満知子(32)

[南壁に新ルートを開拓するために入山。9月6日BC(4,060m)設営。7日C1(4,800m)、15日C2(5,500m)を建設し南壁に取り付く。23日C3(6,300m)、岩壁帯に入り10月14日C4(7,000m)、23日C5(7,500m)を建設。7,800mまで固定ロープを張った。29日、柳沢と青田が初登攀に成功した。31日、第二次隊の加藤

と遠藤は激しい風雪のため加藤が8,000m地点で転落行方不明となった]

[7] 1882年秋

イエティ同人(3)

隊長: ×赤松進(33)/ 隊員: 尾崎隆(30)、×小野幹雄(28)

[北面からの登頂を目指して10月3日BC(4,100m)設営。6日C1(4,800m)建設し尾崎が合流した。11日C2(5,400m)、16日には6,200mまで到達した。アタックは尾崎が単独で行う予定で、17日C3入りの予定であったが待機する二人の調子が悪かったのでC2で休養し翌日移動する予定になった。ところが18日午前4時頃、鎌水河から雪崩が発生しC2を埋めた。尾崎のテントは半分埋まっただけだったが、残る二人のテントを掘り出した時には、既に死亡していた。]

[8] 1983年冬

東京志岳会(4)

隊長: 杉本忠男(39)/ 隊員:

[冬期初登頂を目指して北面に入山。12月2日C2(5,300m)建設。10日C3(6,100m)建設し18日、6,900m地点に到達したが、強風のため登頂を断念した。]

[9] 1984年秋

東京(5)

隊長: 武川俊二(30)/ 隊員: 黒沢孝夫(35)、山崎祐和(29)、庄司康治(25)、熊谷吉勝(24)

[チェコとフランスと合同で、アルパイン・スタイルで登頂し、スキー滑降の予定であったが、6,000mに到達しただけだった。]

[10] 1984年冬~1985年2月

群馬県山岳連盟(15)

隊長: 八木原圀明(38)/ 隊員: 星野光(52)、宮崎勉(37)、山田昇(34)、松永幸雄(36)、名塚秀二(30)、阿部源(31)、清水人志(29)、武田芳政、木村文江(29)、阿久沢芳雄(27)、三枝照雄(26)、佐藤光由(23)、福島光男(36)、新田安紀(30)

[南壁の冬期初登頂を目指してモデイ・コーラ内院の4,200m地点にBC設営。高所順応を終えて、12月1日C1(4,950m)、5日C2(5,850m)、19日C3(6,500m)、24日C4(6,950m)、29日

7,200mまで到達したが、悪天となり、再開したのは1月13日となった。しかし雪崩の危険が増したため登山を中止した。]

[11] 1985年秋

岩遊会(6)

隊長: 安村淳(38)/ 隊員: 徳間勇一(35)、福島晃(38)、橋本則久(29)、坂上文雄(29)、並木喜一(28)

[主峰~中央峰~東峰への縦走を目指して北面に入山したが、6,000m地点に到達して断念した。]

[12] 1987年冬

群馬県山岳連盟(14)

隊長: 八木原圀明(41)/ 隊員: 星野光(54)、宮崎勉(40)、山田昇(37)、×斎藤安平(34)、名塚秀二(33)、木村文江(32)、阿久沢芳雄(30)、三枝照雄(30)、佐藤光由(26)、神戸誠(24)、矢野光一(22)、×小林俊之(22)、藤岡俊樹(29)

[84年の雪辱戦。4,200m地点にBC設営し、前回と同様に高所順応を行い、12月1日、5,300m地点にC1、3日C2(6,100m)を建設したが、南壁から雪崩が発生しC1の物資が全滅した。6日C3(6,800m)、17日C4(7,200m)、18~19日で7,700mまで固定ロープを設置。20日、山田、斎藤、三枝、小林が南壁冬期初登頂に成功した。しかし、下山中、7,900m地点で小林が滑落し行方不明となった。また、斎藤もC4の手前20mで転落行方不明となった。]

[13] 1987年冬

カモシカ同人(4)

隊長: 大蔵喜福(36)/ 隊員: 福島正明(37)、佐藤直美(26)/ 報道: 沢野ひとし(42)

[アルパイン・スタイルでの登頂を目指して、北面に入山。11月22日4,200m地点にBC設営。12月1日、4,900m、2日5,400m、4日、6,000m、5日6,100mに到達したが、雪が少なく氷で登攀が捗らず断念した。]

[14] 1988年秋

どんぐり山の会(8)

隊長: ×森明彦(43)/ 隊員: 小野毅(43)、岡田勇孝(31)、松本吉隆(28)、田村力(30)、勝村宏樹(25)、牧内大雄(22)、山口真(24)

20世紀 日本人アンナプルナⅠ峰登頂者リスト

	氏 名	生年月日	登頂年月日	年齢
1	田中 成三	1947.12.	1979.05.08	31○
2	×柳沢 幸弘	1955.02.	1981.10.29	26
3	青田 浩	1958.01.	1981.10.29	23
4	×山田 昇	1950.02.	1987.12.20	37
5	×三枝 照雄	1957.10.	1987.12.20	30
6	×小林 俊之	1965.10.	1987.12.20	22
7	×斎藤 安平	1953.01.	1987.12.20	34
8	山本 篤	1962.10.	2003.05.16	40
9	高橋 和弘	1973.10.	2003.05.16	29
10	早川 敦	1973.08.	2003.05.16	29
11	森 章一	1975.04.	2003.05.16	28
12	加藤 慶信	1976.01.	2003.05.16	27
13	天野 和明	1977.02.	2003.05.16	26
14	竹内 洋岳	1971.01.	2004.05.29	33

[北西壁からの登頂を目指して、9月16日ミリスティ・コーラ3,800mにBC設営。20日C1(4,900m)、25日から北西壁に取り付き、C2予定地の5,900m地点下50mまで固定ロープを張った。29日、森、小野とアン・ダワがC2予定地へ荷揚げを行い下降、C1まであと一時間の5,000m地点を歩いていた時、上部懸垂氷河が崩落、森とアン・ダワがクレバスに落ち行方不明となった。このため登山は中止された。]

[15] 1991年秋

北海道道央勤労者山岳連盟(11)

隊長：尾谷賢(41)／隊員：小山健二(44)、長水洋(42)、佐藤英樹(43)、北山義美(42)、松本一敏(40)五十嵐辰美(40)、高橋敏子(38)、秋葉政博(39)、阪田一夫(36)、小野睦男(35)

[北面からの登頂を目指して9月10日BC設営。14日ABC(5,100m)、18日C1(5,700m)、22日松本らがプラトールで雪崩に遭う。10月1日ダッチ・リブに向かった隊員が雪崩に埋まり救出された。この日登山中止を決定した。]

[16] 1994年夏

江北山の会(5)

隊長：細田一郎(43)／隊員：平良光司(32)、小久保壮(25)、大宮秀樹(22)、小野寺宏輔(24)、加藤隆次(33)、武田久雄(45)、吉澤留美子(45)

20世紀 アンナプルナⅠ峰死亡者リスト

	氏 名	生年月日	遭難年月日	年齢
1	高橋 貞理	1935.08.	1973.05.18	37
2	濱 正則	1936.07.	1973.05.18	36
3	牛越 正	1942.05.	1973.05.18	30
4	片桐 一三	1949.02.	1973.05.18	23
5	加藤 康二	1949.03.	1981.10.31	32
6	赤松 進		1982.10.18	29
7	小野 幹雄		1982.10.18	30
8	小林 俊之	1965.10.	1987.12.20	22
9	斎藤 安平	1953.01.	1987.12.20	32
10	森 明彦		1989.09.29	43
11	佐藤 理雄	1961.05.	2004.10.10	43
12	名塚 秀二	1954.11.	2004.10.10	49

[解禁された夏のシーズンの登頂を目指して北面に入山。7月～8月の3週間で2カ所のキャンプが雪崩に流され5,840mが最高到達点となった。]

[17] 1997年冬

明治大学(3)

隊長：山本篤(35)／隊員：高橋和弘(24)、豊嶋匡明(23)

[冬期登頂を目指して北面に入山。悪天候のためC2(6,000m)に到達して断念した。]

[18] 2000年秋

愛知県山岳連盟(10)

隊長：石川富康(63)／隊員：中平等新一(64)、瀧根正幹(48)、永田昌美(41)、佐藤理雄(39)、鷲見哲司(38)、角野真弓(36)、桑原博幸(34)、筒井耕二(30)真田季代子(28)

[北面からの登頂を目指して9月13日4,300m地点にBC設営。17日C1(4,900m)、22日C2(5,600m)建設したが23日爆風雪崩のためC2崩壊5,500m地点に再建。10月2日、6,650m地点にC3建設し翌日上部のルート工作を行ったが、日数不足のため登頂を断念した。]

[19] 2003年春

明治大学(11)

隊長：山本篤(40)／隊員：平野眞市(65)、高橋和弘(29)、大窪三恵(30)、早川敦(29)、森章一(28)、加藤慶信(27)、天野和明(26)、松本浩(23)、志賀尚子(35)／撮影：中村進(57)

[南壁からの登頂を目指して3月29日、BC(4,200m)設営。イギリス・ルートに入り、4月3日C1(5,000m)、13日C2(6,100m)、18日C3(6,600m)と進んだが27日悪天のため全員BCへ下山。5月13日C4(7,400m)16日、山本、高橋、早川、森、加藤、天野とHAP2名が登頂に成功した。]

[20] 2004年春

竹内洋岳(33)

[ドイツのラルフ・ドゥイモフィッツ、女性のゲルリンデ・カルテンブルンナと組んで北面初登ルートから挑戦、5月28日三人とも登頂に成功した。三人はシシャパンマ南西壁から転進したもの。]

[21] 2004年秋

愛知県山岳連盟(4)

隊長：×佐藤理雄(43)／隊員：×名塚秀二(49)、西村英樹(32)、山本季夫(30)

[北面からの登頂を目指して入山。9月中旬BC入り、C1(5,700m)建設後C3まで建設し、10月10日、佐藤、名塚、西村、山本がC2へ向かう途中、6,300m地点で雪崩に遭い、山本は脱出したが、佐藤、名塚は死亡した。二人の遺体は発見され収容した。名塚はこの挑戦が成功すれば、山田昇の九座を抜いて八千メートル峰十座登頂となり日本人最高記録となるはずであった。]

アンナブルナI峰南壁〔GREAT HIMALAYA〕白簀史朗より



地域ニュース

《ネパール》

名塚秀二、アンナブルナ雪崩遭難

愛知県山岳連盟が、ネパール・ヒマラヤのアンナブルナ I (8,091m) に派遣した登山隊（佐藤理雄隊長(43)ら 4 名）が10月10日、標高6,300m地点で雪崩に襲われ佐藤隊長と名塚秀二登攀隊長(49)が死亡した。遺体は収容された。

登山隊は9月中旬、北面初登ルートからの登頂を目指してBCを設営した。それ以後C1、C2、C3を建設し、10日は、西村英樹(32)、山本季生(30)を含めた全隊員がアタックのため上部キャンプ入りを目指して移動中であった。

名塚、山本、佐藤、西村の順で登高中、上部から音もなく氷塊が落下し、固定ロープに入っていなかった名塚が直撃を受け約550m滑落し、次いで佐藤隊長も滑落し二人共死亡が確認された。

天候が悪化したため、残った二人の隊員とHAPなどスタッフがヘリコプターで下山。その後、天候の回復を待って、隊員とHAP10名がヘリコプターで現地へ入り、二人の遺体が22日カトマンズに収容され、24日カトマンズで荼毘に付された。

名塚登攀隊長は、今回の登山が成功すれば八千メートル峰14座の、日本人としては最高の10座目の登頂になる筈であった。

また、佐藤隊長は、2000年秋に同岳連が同峰北面に派遣した登山隊で約6,000mに到達していた。

《中国》

岩手、千葉隊がチョー・オユーを断念

チョー・オユー(8,201m)の通常ルートから登頂を目指していた千葉富夫隊長(68)ら 4 名は、9月20日、6,600m地点で登頂を断念した。登山隊は隊長夫人(63)、娘(33)とその友人で構成され、HAPを使用しないで試みられた。断念の主原因は夫人の高山病。

新潟隊がチュアギャジマ(5,953m)に初登頂

新潟県山岳協会が青海省、メコン川源流にあるチュアギャジマ主峰の初登頂を目指して派遣した登山隊（阿部信一隊長(57)ら 8 名）は、7月31日、阿部隊長と柿沼美保(25)、鈴木勝利(59)両隊員が初登頂に成功した。

《パキスタン》

プバリッシュ I (6,824m) 登頂断念

豊橋山岳会の中山秀樹(49)が7月26日南面3,700m地点にBCを設営。28日稜線に直接上がるルンゼをつめ4,300m地点に達したが、最上部で懸垂氷河の崩落がありグロッ雪崩となり、その下敷きとなり負傷、登攀具を失ったため登山を断念した。

ラトック V (6,190m) 登頂断念

山岳同人B.S.Rが、ラトックVに派遣した登山隊（大宮求隊長ら 3 名）は、大宮隊長が不調のためBC入り出来ず、HAP 4 名を伴って8月12日BC(4,700m)設営。C1(5,100m)、C2(5,200m)、C3(5,900mIV峰とV峰のコル)を建設したが、17日、6,100mに到達して登頂を断念した。

《ネパール》

片山右京がマナスル(8,163m)へ挑戦

元F1レーサーの片山右京(41)が今秋、マナスル登頂を目指すことになった。10月19日、日本を出発し、27日、BCを設営。通常ルートからキャンプを3つ出し、11月中旬の登頂を目指す。

片山はチョー・オユー(8,201m)、シシャパンマ中央峰(8,008m)に登頂しており、八千メートル峰14座登頂を目指している。

片山は「高所遠足」を否定し、「子供たちに頑張ることの大切さを訴えているので、どんな苦しくても自分の力で登りたい」とし、荷上げや固定ロープ設置も自ら手がける。隊長は宇佐美栄一。

片山はマナスル登山終了後、「バリ・ダカ」に挑む予定。

日本の八千メートル峰登山が「高所遠足」ばやりの中にあって片山の挑戦姿勢が注目される。

トピックス

第2回 日本山岳文化学会のお知らせ

昨年旗上げた「山岳文化学会」は、本年5月の総会で名称に「日本」を付してさらなる発展を目指している。その研究発表大会が下記のとおり開催される。

記

1. 名称：日本山岳文化学会大会
2. 主催：日本山岳文化学会(会長：斎藤一男)
3. 日時：2004年11月27日(土) 9時～17時40分
懇親会：18時～20時
4. 場所：東京慈恵会医科大学高木会館2号館
(東京、西新橋)
5. 会費：3千円、懇親会は別途3千円
6. 内容：〔招請講演〕山岳映像の世界－映像の持つ記録性－(羽田英治)

〔一般演題〕我が国における山岳診療所(大森薫雄)／目撃した動物とその足跡(高橋好輝)／近代以前の日本山岳観念(藤原ゆり子)／積雪期黒部別山(酒井國光)／世界のピッケル鍛冶概説(諏訪部豊)／レスキューにおけるスリングの巻き方(堤信夫)／富士講・富士塚研究報告(石森良博)など18演題

7. 申し込み、問い合わせ先：
〒136-0074 東京都江東区東砂1-1-1-401
國見利夫方 日本山岳文化学会
TEL&FAX 03-3646-7667
※どなたでも参加できます。

Books

知られざるパンゴン山脈の山

本号で記録を掲載した中京山岳会インドヒマラヤ登山隊の報告書。未知の山域と登山の様子が、パソコンによって写真・地図も美しく処理されて、見やすく読みやすい仕上がりとなっている。95年のインド隊によるこの周辺の記録も訳出されていて

参考になる。

A4判 70頁 限定30部 2004年10月24日刊

連絡先：〒461-0011 名古屋市東区白壁1-27-3-405

織田善夫方

東海山岳 No.9 2004

日本山岳会東海支部が発行している報告、研究集、外国登山の記録(支部主催)／外国登山の記録(個人)／支部設立40周年記念事業報告／研究、論考／展望－昨日・今日・明日－／国内登山、紀行、追悼、図書紹介／東海支部年表と豊富で多彩な内容で構成されている。

A5判 554頁 2004年10月7日刊 〒460-0014
名古屋市中区富士見町8-8 OMCビル 日本山岳会

ヒマラヤから

シシャバンマ便り

7年連続でリーダーとしてヒマラヤ通いをしていましたが、今秋は一隊員として気軽に大蔵喜福隊長のもと、シシャバンマ中央峰(8,008m)に出かけてきました。

7,000m峰と違って厳しいものでしたが、9月27日、中央峰の頂きにこの秋の最初の登頂隊として登ることができました。

C1からC2に向かう所から酸素マスクをつけたお蔭で69歳と7日といった老齡ハンディキャップも克服できた様です。

チベットでも下山したカトマンズにも絵ハガキ1枚なくさびしい限りです。

2004年.10.10 流山市 南井 英弘

東京集会のお知らせ

日時 11月29日(月) 午後7時～

内容 名塚秀二常務理事追悼

場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

2005年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2005年 7月15日(金)～ 8月22日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日（定員になり次第〆切）

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰（北峰）を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2005年 7月23日～ 8月28日（37日間）
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。

HAJ販売書籍案内

書 名	価 格	送 料
1. 雪の住処35年の記録（HAJ創立35周年記念誌）	3, 5 0 0 円	(4 5 0 円)
2. 天壇の山に挑む（ミニヤ・コンカ1991年隊）	2, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
3. 勇者よ永遠に、ナンガ・パルバット（1984年隊事故報告）	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
4. 千人の悪魔の峰、マモストン・カンリ（1984年隊）	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
5. 烈風の彼方へ、冬期マナスル（1982年隊）	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
6. ナンダ・カート（1981年隊事故報告）	2, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
7. 聖地巡礼の旅（サトパント1990年隊）	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
8. “神の河” プラマプトラの激流を下る（1990～1991年）	2, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
9. 知られざる北部シッキムの山々	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
10. 東部カラコルム	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
11. ナマステ、サラスワティ（1992年隊）	2, 0 0 0 円	(3 1 0 円)
12. 崑崙の頂を踏む、青海・玉珠峰（1993年隊）	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
13. 天女の山（玉虚峰）（1994年隊）	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
14. ヒマラヤ、そして仲間達へ（ケダルナート・ドーム1980年隊）	1, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
15. ルンボ・カンリ（1994年隊）	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
16. 中国登山の手引き（第5版）	3, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
17. ニンチン・カンサ（1997年隊）	1, 6 0 0 円	(2 1 0 円)
18. NUN登頂 '83	1, 0 0 0 円	(2 1 0 円)
19. 天府の霊峰 雪宝頂（1986年初登頂隊）	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
20. 麗しき四川の夏 雪宝頂登頂（1991年隊）	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)

奥山章(OKUYAMA Akira) 1925.8.28—1972.7.2
東京都文京区生れ。小学校卒業し夜間の工業学校に通いながら登山用具を買い揃え、東京近郊の山々を登り始めた。やがて無線電信講習所の学生となり、ハッ岳や南アルプスを登る。1943年講習所を繰り上げ卒業し、大本営参謀本部に通信手として配属になる。この年円山雅也と谷川岳一ノ倉沢滝沢下部登攀。47年8月一ノ倉沢コップ状岩壁登攀。52年夏、明神岳最南峰下2,263m峰東壁初登攀。56年「岳人友の会」世話人。8月明神岳V峰東壁中央フェース右壁初登攀。57年登山用具店「梓」を開き、9月明神岳V峰南壁初登攀。58年1月北岳バットレス中央稜の積雪期初登攀を芳野満彦、吉尾弘、甘利仁朗、小坂橋徹と組んで成功させた。この登攀の後、1月31日第二次RCC結成。3月一ノ倉沢烏帽子沢奥壁凹状ルート初登攀を雲表倶楽部と積雪期に成功させた。63年「シャモニーの休日」製作上映。66年RCCⅡがカフカズに派遣した登山隊(上田哲農隊長ら8名)に参加、松島利夫と共にシケリダの登山学校に一週間入学した。67年(夏)今井通子、若山美子がマッターホルン北壁を登攀するのに同行し、加藤滝男と撮影を行う。43年(夏)植木毅のモンブラン滑降を撮影し、トリノで開催された「国際アルピニスト会議」に日本代表として参加。69年(春)日本ヒマラヤ・スキー登山隊を率いて、インド、ディオ・ティバ(6,001m)に登頂し山頂からのスキー滑降を撮影。71年「日本アルパイン・ガイド協会」を発足させ、専務理事に就任。秋、再びインド、ヒマチャル・プラデシュの撮影。RCCⅡ隊として朝日新聞後援によるエヴェレスト南壁計画を発表。72年、日本勤労者山岳連盟がインドのエヴェレスト隊隊長、M.Sコーリーを招いて行った「ヒマラヤ講演と映画の夕べ」に協力し全国を回った。72年7月2日、上顎ガンの治療療養中のところ自宅でガス自殺。戦後のアルピニズム隆盛の中核をなしたRCCⅡ牽引者として、多くのアルピニストに強烈な影響を与え、その主張は「奥山喇叭」として愛された。著書に「ザイルを結ぶとき」(1973年)がある。

小原ケイ(OHARA Kei) 1928.1.15—1968.6.24
18歳の頃より丹沢を中心に約10年登山。以後谷川岳、尾瀬、南アルプスで経験を積み、1956年登歩渓流会に入会。北アルプスで岩登りを行う。67年登歩渓流会としては初めての女性代表に就任。68年(夏)登歩渓流会隊を率いて山田長政、吉野勲とインド、キュシュトワール山群のシックルムーン(当時はバランザール6,575m)に挑戦。入山前に書類待ちを利用してネパールを訪れた。6月11日BC設営。12日C1(3,870m)、14日C2(4,530m)、16日C3(4,850m)建設。18日ビバークを予定してアタックを行う。19日、リンジも加わりビバークし、20日アタックしたが、山田が高山病になり断念。C3へ戻る途中小原がスリップ。小原が二度目のスリップし止めた吉野が腰を痛め自力歩行が困難になり時間をとられビバーク。翌日も150m下ってビバーク。22日リンジを救援に下ろし、3人のHAPが到着し同所でビバーク。23日、5,700mまで下って岩場のテラスに分散してビバーク。24日、下る準備をして上のテラスの小原を呼ぶと、前向きのまま転落し岩にぶつかりながら、氷河へ落ち行方不明となった。小原は日本女性としては、60年のブッシュ山の会のディオ・ティバ隊(細川沙多子隊長ら6名)に次ぐヒマラヤへの挑戦であった。遺稿・追悼集に「山旅のらくがき」(1968年)がある。

関田美智子(SEKITA Michiko)

1939.5.10—1976.5.3 東京都墨田区生れ。1958年東京学芸大学に入学し、登山を始める。63年エーデルワイス・クラブに入会し、本格的な岩登りを開始。65年日本女子大学入学。66年(春)ネパール、ロールワリンをトレッキング。67年(夏)清水聡子(26)、阿部正子(24)とボリビア・アンデスのワイナ・ポトシ(6,094m)に登頂。69年「山岳同人凌雪会」創立。70年(春)中央ネパールトレッキング。72年(夏)凌雪会を率いてアラスカ、マッキンリー(6,194m)に挑戦。ルートはウエスタン・リブであったが、6月29日アタックした矢島伸枝(28)、外山みつ子(30)、渡辺幸子(24)が消息を絶ち後日、

4,500m地点で凍死体で発見された。74年(春)同人ユングフラウがマナスル(8,163m)に派遣した登山隊(黒石恒隊長ら11名)に参加。関田はC4(7,200m)に到達したが、隊は5月4日、中世古直子(33)、内田昌子(33)、森美枝子(32)が、世界初の女性八千メートル峰登頂に成功した。76年5月3日、凌霄雪山行中、穂高岳の間の岳稜線から転落死亡した。女性同士による登山を推進した指導的立場の一人であった。遺稿追悼集に「飛翔」(S52年)がある。

小山良子(KOYAMA Yoshiko)

1952.1.8－1996.5.12 群馬県前橋市生れ。1983年多摩美術大学に入学し、山岳部に入り本格的な登山を開始。北、南アルプス、ハッテ岳などで四季の登山経験を積み、卒業前から岩登りも始める。

■ 寸 感 ■

1979年11月1日、高田馬場にH A J事務所がオープンし、私が初代の専従職員となり、それから満25年となった。高田馬場15年、東池袋10年である。この間、ヒマラヤ登山を取り巻く環境は大きく変化した。

カンチェンジュンガ縦走登山を切っ掛けに専従職員として実務を担当して来たが、好きでなければ務まらない状態が続いた。

ネパール、インド、中国との合同登山で数々の成果を上げた反面、ナンダ・カート、ナンガ・パールバット、ミニヤ・コンカの雪崩による大量遭難をはじめ、尊い仲間がヒマラヤの山中に眠る。

行動し、報告会を開き報告書を発刊し、手引き書を出した。地域研究会、啓蒙会議を全国で開催し会の内外から重宝がられた。

気がつけば、80年代初頭のヒマラヤ登山を牽引していたライバル集団は、その面影すらなく、一人、H A Jだけが孤軍奮闘する破目になった。

会の次代を担うはずであった現役ヒマラヤニストが次から次へとヒマラヤに召されるという巡り合わせもあった。

蔭で多くの仲間たちが支えてくれている。経済的、精神的、物理的なその支援を私は「信頼」と表現し続けてきた。ありがとう。そしてそろそろ私にも引導を言い渡す若者が欲しい。(山森)

92年山岳会登研に入会。アイスクライミングを始める。93年(秋)ネパールトレッキング。同年(冬)アコンカグア(6,959m)登頂。94年バーバリアンクラブに入会。94年(秋)バーバリアンクラブが、ネパール、プモ・リ(7,161m)に派遣した登山隊(野沢井歩隊長ら5名)に参加、南稜の6,400mに到達したが登頂は断念したが隊長と山口直之が10月22日登頂に成功した。95年(冬)野沢井歩とネパール、パルチャモ(6,187m)に挑戦、12月8日登頂した。96年5月12日、HAJが中国、ムスターグ・アタ(7,546m)に派遣する登山隊に参加するための訓練として登山中の富士山で滑落死亡した。遺稿追悼集に「楽しかった山 辛かった山 もっと、もっと登りたかった山」(1997年)がある。

事務局日誌 (10月)

- 1日(金) 華甲望年会／山森理事長専従25年労働会案内発送
- 8日(金) H K Tに「高峰登山調査用紙統一」有料広告の件についてFAX
- 9日(土) ヒマラヤ396号発送
- 10日(日) 名塚秀二常務理事、アンナプルナI峰で雪崩遭難死の連絡入る
- 11日(月) 名塚常務理事遭難の件、関係先へFAXにて連絡
- 14日(木) 労山、川嶋高志事務局長来会
- 20日(水) 「高峰登山調査用紙統一」についてH K Tの件、山岳3団体へ連絡
- 21日(木) 上記広告について「岳人」、「山と溪谷」と出稿について協議
- 25日(月) 東京集会(17名)

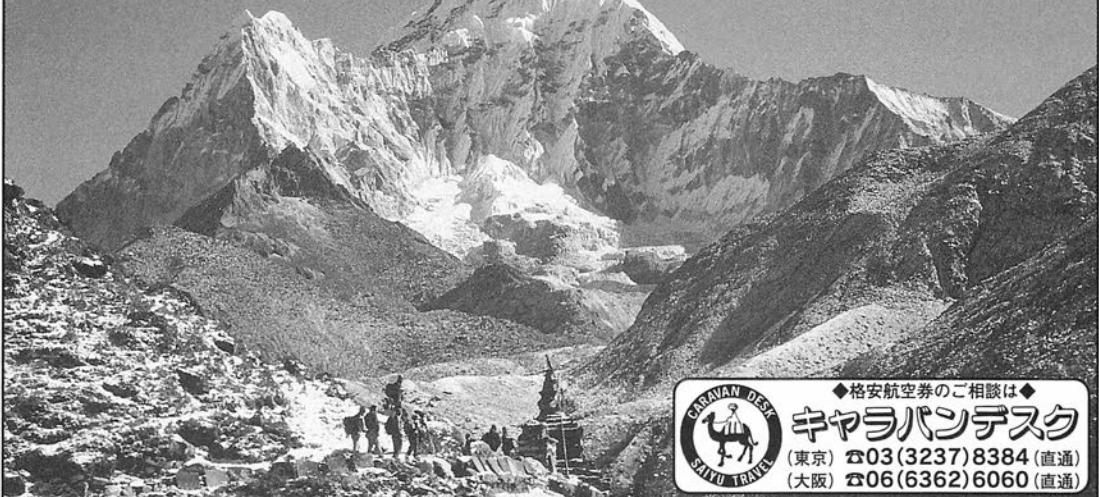
ヒマラヤ No.397 (12月号)

平成16年11月10日印刷 16年12月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャラバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1



株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

お問い合わせ・お申し込みにはフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811391

東京新聞の山岳書

東京新聞出版局
中日新聞東京本社

〒100-0011 東京都千代田区幸町2-1-4 日比谷中ビル6F
[TEL] 03-3595-4830(代) [FAX] 03-3595-4831
<http://www.tokyo-np.co.jp/tbook/>

※定価額に消費税も含まれています。

最新クライミング技術

菊地 敏之 著

フリークライミングがマルチピッチ・アルパイン・ビッグウォールまですべてのロッククライマーへの、実践的な最新技術書。つむぎの技術を、単なるマニュアルとしてではなく、その意味や選択基準までを含め解説。

1,680円

ベシック・フリークライミング

菊地 敏之 著

新しい生涯スポーツとしてあらゆる世代に爆発的な人気のフリークライミングを、ムーブの作り方、ロープワーク、自然壁の登り方、スキルアップのしかたや取り組み方を、多岐にわたる項目にわたって、ビジュアルでわかりやすく、かつ理論的に解説。ジムから始めてアウトドアを目指す、すべてのクライマーのための教科書の本を自指す。

1,785円

山小屋の主人の炉端話

工藤 隆雄 著

著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る人話の取て置きのお話。

1,575円

チャレンジャー・アルパインクライミング

【北アルプス編】
廣川 健太郎 著

北アルプス全域を代表する7ルートに分かりやすくカラー写真で解説したルート案内書。夏の岩壁、雪後のバリエーションルートに加え、これまでほとんど紹介されていない冬期岩壁登攀、ルンゼ登攀を紹介。

2,625円

チャレンジャー・アルパインクライミング

【南アルプス・ハク岳・谷川岳編】
廣川 健太郎 著

上巻の北アルプス編に続いて、南アルプス・ハク岳・谷川岳などから、日本を代表するアルパインクライミングルート3本を、写真を豊富に使ってわかりやすく解説したルートガイドの決定版。

2,625円

すぐ役立つ山のメモ帖

岳人編集部 編

登山の実践から環境問題、山の文化誌にいたるまでさまざまな話題を掲載。

1,470円

中高年の雪山入門

福島 正明 著

低山から夢のヒマラヤまで、トフルを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら雪山歩きを楽しむ。

1,680円

すぐ役立つ新・山の雑学ノート・第1集

岳人編集部 編

山での話題が登った山の数だけではない。豊富な雑学が登山をより楽しくより安全にしてくれる。

1,470円

女性ガイドのしなやか登山術

樋口 英子 著

常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっと素敵になると呼びかける。女性登山ガイドのユニークな登山講座。

1,575円

登山の運動生理学百科

山本 正嘉 著

「どうして合理的で安全な登山ができるのかを、ヒマラヤなど高所登山実情を踏まえて、分かりやすくまとめた。」

2,100円

山書散策

河村 正之 著

今まで数多く発刊された山書。何を読んだらよいか。そんな時の指針として――「山人」連載時から好評。

1,575円

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

ICI本店	〒169-0073	東京都新宿区百人町2-1-2	03-3208-6601	新潟とやの店	〒950-0982	新潟県新潟市堀之内南1-16-52	025-241-5134
新宿西口店	〒160-0023	東京都新宿区西新宿1-16-7	03-3346-0301	仙台店	〒983-0852	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8	022-297-2442
神田登山店	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町1-6-1 (タキビル2F)	03-3295-0622	秋田広小路店	〒010-0001	秋田県秋田市中通1-4-5	018-884-1771
神田本館	〒101-0051	東京都千代田区神田小川町3-10	03-3295-3215	盛岡大通店	〒020-0022	岩手県盛岡市大通1-10-16	019-626-2122
八王子店	〒192-0081	東京都八王子市横山町3-12	0426-46-5211	札幌店	〒060-0062	北海道札幌市中央区南二条西4-8	011-222-3535
大宮店	〒330-0802	埼玉県さいたま市大宮区宮町1-37	048-641-5707	北十二条店	〒001-0012	北海道札幌市北区北十二条西3-5	011-747-3062
高崎店	〒370-0831	群馬県高崎市新町5-3	027-327-2397	伏古店	〒007-0861	北海道札幌市東区伏古一条4-1-45	011-787-0233
川越店	〒350-0045	埼玉県川越市南通町14-4	0492-26-6751	大阪ミナミ店	〒556-0005	大阪府大阪市浪速区日本橋4-9-17	06-6636-2470
甲府店	〒400-0814	山梨県甲府市上阿原町481-1	055-221-0141	神戸三宮店	〒650-0021	兵庫県神戸市中央区三宮町1-3-10	078-335-0355
宇都宮今泉店	〒321-0962	栃木県宇都宮市今泉町1560	028-639-9650	外商部 (メールオーダー係)	〒169-0073	東京都新宿区百人町2-1-2	03-3200-7219
太田高林店	〒373-0825	群馬県太田市高林東町1386	0276-38-0620				
松本店	〒390-0874	長野県松本市大手3-4-24	0263-36-3039				
長野店	〒380-0825	長野県長野市末広町1356	026-229-7739				
茅野駅前店	〒391-0001	長野県茅野市茅野3502-1	0266-82-8510				
新潟店	〒950-0087	新潟県新潟市東大通2-5-1	025-243-6330				



ICI 石井スポーツ